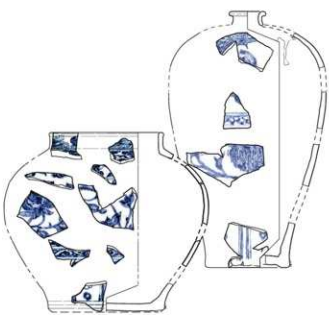
北谷町文化財調査報告書　第 45 集

北谷城（ちゃたんぐすく）

― 総括報告書（補遺編）―



2020（令和２）年 10 月

沖縄県　北谷町教育委員会

例　言

1. 本書は、北谷町文化財調査報告書第44集『北谷城－総括報告書－』の補遺編である。
2. 本書では、第44集の本文・図面等を一部修正して再掲したほか、新資料を報告する。
3. 一部修正した本文・図面等は、目次にて第44集の掲載頁等（括弧書き内）を示した。
4. 本書の例言は、第44集に準じる。

本文目次

例言

第Ⅰ章　補遺編作成の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第Ⅱ章　縄張調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第Ⅲ章　検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1．一の曲輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1（79頁）

2．東側の丘陵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10（86頁）

3．二の曲輪及び出入口・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11（89頁）

4．三の曲輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19（104頁）

5．三の曲輪北西端部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24（111頁）

6．四の曲輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29（117頁）

7．城門付近・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30（122頁）

第Ⅳ章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38（361頁）

挿図目次

第1図 縄張・・・・・・・・・・・・・・・・2

第2図 調査地全体・・・・・・・・・・・・・・4（77頁 第25図）

第3図 一の曲輪・東丘陵調査地拡大・・・・・6（81頁 第27図）

第4図 一の曲輪遺構平面・・・・・・・・・8（83頁 第28図）

第5図 二の曲輪調査地拡大・・・・・・・・12（91頁 第32図）

第6図 二の曲輪遺構平面1・・・・・・・・14（95頁 第34図）

第7図 二の曲輪遺構平面2・・・・・・・・16（97頁 第35図）

第8図 二の曲輪遺構平面3・・・・・・・・18（103頁 第38図）

第9図 三の曲輪調査地拡大・・・・・・・・20（105頁 第40図）

第10図 U-82～84平面・断面・・・・・・・22（107頁 第41図）

第11図 三の曲輪遺構平面・・・・・・・・23（108頁 第42図）

第12図 B'-81平面・断面・・・・・・・・24（109頁 第43図）

第13図 W-77断面・・・・・・・・・・・・25（110頁 第44図）

第14図 三の曲輪北西部調査地拡大・・・・26（113頁 第46図）

第15図 三の曲輪北西部遺構平面・・・・・28（112頁 第45図）

第16図 M'・N'-55平面・断面・・・・・・・30（119頁 第49図）

第17図 P-32平面・断面・・・・・・・・・31（118頁 第48図）

第18図 四の曲輪調査地拡大・・・・・・・32（121頁 第50図）

第19図 四の曲輪（城門付近）遺構平面・・・34（123頁 第51図）

第20図 四の曲輪（城門付近）遺構立面・・・36（125頁 第52図）

第21図 遺構全体・・・・・・・・・・・・40

図版目次

図版1　東壁石垣（内側）北向けに撮影・・・8（83頁 図版31）

図版2　遺物出土状況（東壁付近）・・・・・・8（83頁 図版32）

図版3　水溜状遺構（左：遠景、右：近景）・・・9（85頁 図版35）

図版4　U-82東壁・・・・・・・・・・・・・22（107頁 図版36）

図版5　B'-81東壁・・・・・・・・・・・・・24（109頁 図版37）

図版6　W-77壁面（左：南壁、右：東壁）・・25（110頁 図版38）

図版7　四の曲輪南側城壁（南向きに撮影）・・29（117頁 図版39）

図版8　M'・N'-55平面・・・・・・・・・・30（118頁 図版48）

図版9　P-32平面・・・・・・・・・・・・・31（121頁 図版41）

参考資料

文献資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

第Ⅰ章　補遺編作成の経緯

北谷町教育委員会では、北谷城の保存目的のために 1983（昭和 58）年度以降計 17 回の調査を実施してきた。2020（令和２）年３月には、その成果をまとめ、北谷町文化財調査報告書第 44 集『北谷城―総括報告書―』（以下、「第 44 集」という。）を刊行した。

しかし、刊行した報告書において未掲載であった参考文献や史料原文があったほか、本文・図面等の一部修正・追記等の必要性が生じた。そのため、これらの追加・修正を行った部分についてまとめ、第 44 集の補遺編として本報告書を刊行することとなった。そのため本報告書と第 44 集は補完関係にあり、内容については修正・追記等が必要な部分を第 44 集から抜粋し掲載している。

第Ⅱ章　縄張調査

北谷城の縄張調査については、基地内への立入りが可能になった平成 30 年３月 20 日から令和元年 12 月 31 日にかけて適宜現地での踏査を実施し、縄張図を作成していたが、第 44 集の報告書刊行時には縄張図を完成させるには至らなかった。そのため、第 44 集刊行後の令和２年９月に追加調査を実施したほか、「北谷城調査審議委員会」の當眞嗣一委員に助言を頂き、縄張図を作成した。

第Ⅲ章　検出遺構

1. 一の曲輪

一の曲輪の調査

調査次	調査実施グリッド	面積
第１次	D-112、V-115	２m×２m×２＝８㎡
第８次	ソ-71・72、ツ-71～74、ネ-70～72、ナ-71～73、ラ-71～73、ム-71～73	５m×５m×18＝450 ㎡
第９次	（第８次調査の測量）	-

合計面積：約 458 ㎡

１）石垣

第８次調査において、一の曲輪の東・南壁となる石垣が検出された。細長く伸びるグスク丘陵の最高地（標高 42 ～ 44 m）を横断するように構築されている。南北は約 25 m を測り、端部両隅は曲線を描く。

1982 年の平板測量によると、この付近の石垣は東向きに開口しており、門があったことを窺わせていたが、「北谷城史跡基本構想策定審議会議事録（平成５年７月２日）」では、以下のような記述がある。「（前略）東から正面につき当たると広場があって、奥の方にもコの字形になった石が見える。それはもしかすると、元々からあるものではないかという指摘がありましたが、最初の頃で性格が分からなかったのです。とりあえず残っている石垣を書いて行こう、という事で作図したものなのです。この部分は去年、はずましたので現在はありませんが、丁度この白い所に米軍が立てた電柱の跡があり、おそらくそのために壊されたのだろうと考えているのです。」この記述だけでは事の詳細が十分には分からないが、1982 年に測量された「石垣」の形状は、米軍による改変の影響を受けていた可能性が高い。

東壁の内面（西面）側の石垣は野面積みで、この内面から６m 及び９m 外（東）側に布積みの外面（東面）石垣が二面認められた。二面の外面石垣のうち、西側のものは石灰岩やサンゴ礫を用い

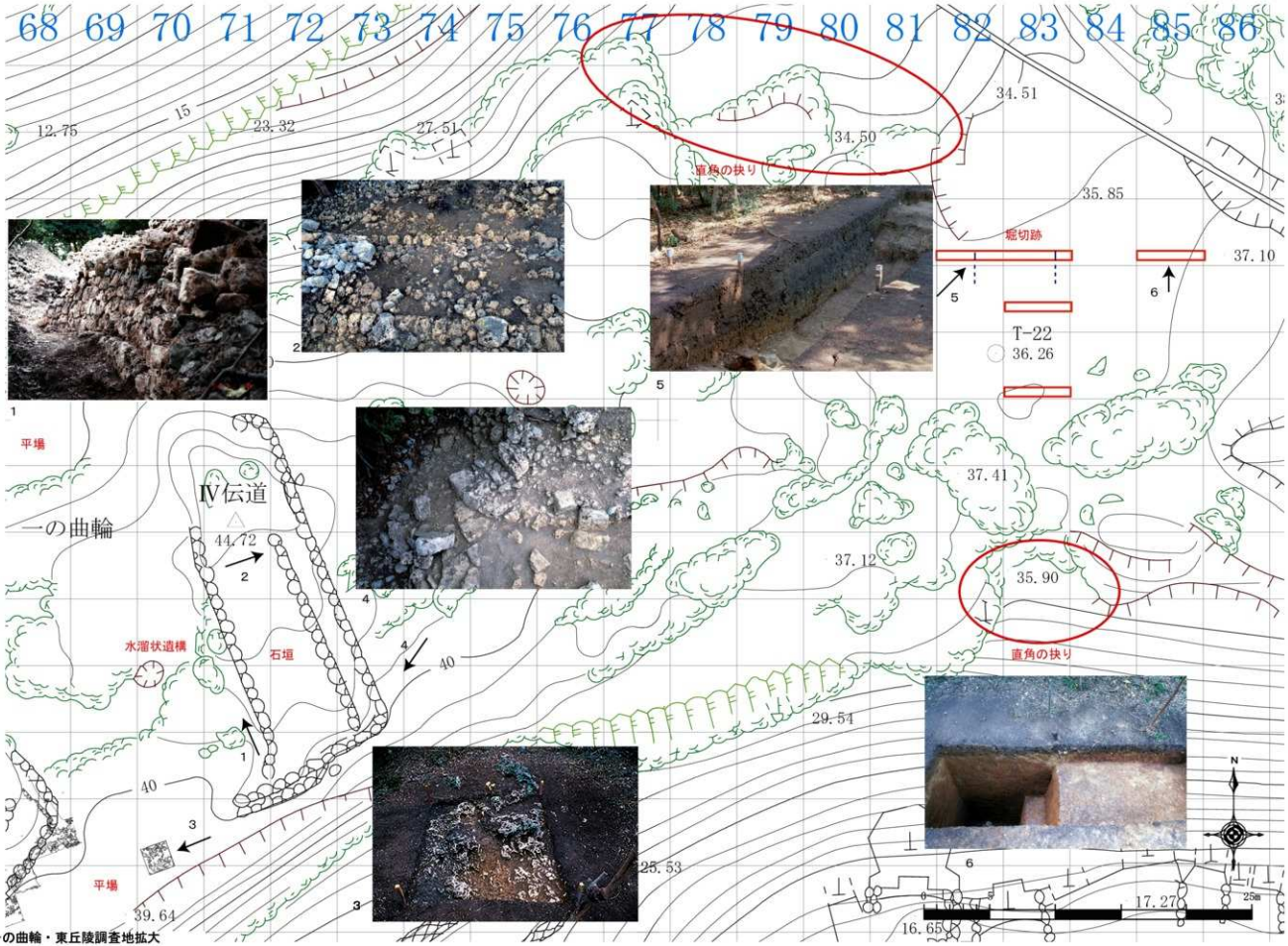
本図は、平成4年調整の地形図を基に平成28年計測の赤色立体地図（アジア航測作成）を参照して作成した。

0　100m

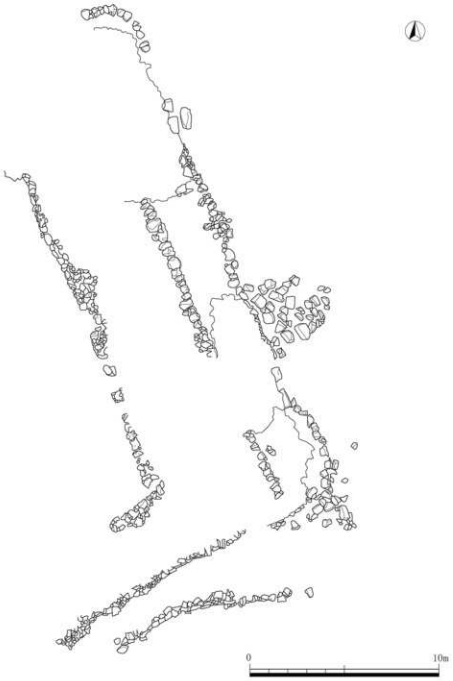
第1図　縄張

第14図
第3図
第5図
第9図
第18図
凡例
1次
2次
3次
4次
5次
6次
7次
8次
9次
10次
11次
露岩
壁岩
石垣
おう地
石積
斜面
墓
調査区規模は、1～7次は2m、他5m角となる。
0
50m

第２図　調査地全体



第３図　一の曲輪・東丘陵調査地拡大



第４図　一の曲輪遺構平面

図版１　東壁石垣（内側）北向けに撮影

図版２　遺物出土状況（東壁付近）

ており、粗い打ち欠きで成形される。東側のものは石灰岩のみを用い、70 × 40 ㎝ほどの角切礫が並ぶ。この周辺から骨製鏃が出土している。また、南壁においても外面（南面）の石垣が二面検出されているが（ム・ウ -71・72 グリッド）、こちらは６，７段ほどが積まれた状態で残存していた。

外面に二面の石垣が存在する理由として、①外側に犬走りがあった、②拡張・増築があった、③力学的な工法、といったことが挙げられる。それぞれの積み方が異なることから考えると、拡張があった可能性が最も妥当なように感じられるが、補強の意味を兼ねた「化粧積み」といった可能性も想定されている[註１]。いずれにせよ、下部幅が６～９ｍあったということは、石垣自体が相当な高さを有していたことが考えられる。

ここに門が存在したかどうかについても、前述の審議会にて議論とはなったものの、いずれにしても根石より上部の構造であったであろうと想定され、今のところ不明のままである。

今回は検出作業のみに留まったため、具体的な構築時期は不明であった。なお、検出作業を通じて得られた遺物の殆どが 14 ～ 15 世紀のもので、石垣南西隅からはイルカの骨の出土が目立った。

また、一の曲輪と二の曲輪の境でも石灰岩の切石の根石が検出されている。

註１．石垣を実見した青山学院大学教授田村晃一氏及び金武正紀氏からの所見による（「北谷城史跡基本構想策定審議会議事録（平成４年 12 月 17 日）」『北谷城史跡整備基本構想』北谷町教育委員会、1994）。

２）中央の平場

一の曲輪の中央部には石灰岩の露岩があり、これを削平して平場が形成されている。このため殆ど堆積土が残っていなかったが、その南北に一段下がった所に細長い平場があり、それぞれに１か所ずつトレンチを設けて発掘を行った。遺物は基本層序のⅠａ、Ⅰｂ層で確認され、Ⅰｂ層から主体的に出土した。青磁・白磁・褐釉陶器等の貿易陶磁器の出土が目立つが、２㎝以下の小破片が多く見られる。また、沖縄産陶器や明朝系瓦などが含まれていることから、グスク時代のオリジナルの層序は残存しない。これらは、近現代の耕作の影響によるものと考えられる。グスク最奥部及び最高所にあたるこの空間が、どのような役割を果たしていたか、今後の調査で確認が必要である。

３）水溜状遺構

『北谷町史』によると、直径約 1.5 ｍ、深さ約 1.5 ｍを測る円筒形の遺構が、一の曲輪東側の岩盤の窪みに形成されており、「用途については不明であるが、水溜の可能性がある」[註１]としている。

註１．知念勇氏の記述（『北谷町史 第一巻 通史編』北谷町教育委員会、2005、P217）。

図版３　水溜状遺構（左：遠景、右：近景）

2．東側の丘陵

東側の丘陵の調査

調査次	調査実施グリッド	面積
第9次	ヨ-82・83・85、タ-83、ツ-83	**合計面積：約 37.5 ㎡**

一の曲輪東壁外面から 50 mほど東側に緩やかな窪地があり、この窪地の南北両端崖面には直角の抉りがみられた。丘陵一帯では石灰岩の露岩が確認できるが、この窪地の北側には認められないことから、当地が堀切である可能性を視野に入れ発掘調査を行った。５か所のグリッドで幅 1.5 m×長さ５mのトレンチを設定し、３グリッド（ヨ-82・83・85）から有意な成果を得られた。ほかの２グリッド（タ-83・ツ-83）では浅深度で岩盤が確認された。以下、ヨ-82・83・85 グリッドの状況について述べる。なお、本項で記述する層序のみ、第 44 集 87 頁第 31 図と対応させている。

1）ヨ-82・83 グリッド

２か所のグリッドを連結したため、トレンチ規模は幅 1.5 m×長さ 10 mとなる。深さ１m強まで掘り下げた結果、緩やかに窪んだ地形を呈していることが分かった。

Ⅲ層下で東に偏った混貝層（Ⅵ層）を検出、更に窪みの底面近くから別の混貝層（Ⅹ層）が確認された。混貝層の上層（Ⅸ層）では集石遺構が認められ、同遺構の下部から炭化物が多出した。

2）ヨ-85 グリッド

前述のヨ-82・83 トレンチから５m離れた場所に位置し、地表面から深さ 2.7 mで岩盤が確認された。遺物は厚さ 20 ㎝の表土層からのみ出土し、以下岩盤までは皆無であった。これらの無遺物層は自然堆積と捉えられる。厚い堆積土から、当地がかつて窪んでいたことが推測される。

小結

ヨ-82・83 にて尾根を分断する形で検出された窪んだ地形は、調査時には堀切と捉えていない。本報告では、次の理由から何らかの防御機能を有していた遺構（堀切跡）と捉えた。

１、ヨ-82 の集石遺構下部から採取した炭化物の年代値が 14 世紀前半から 15 世紀前半を示した。
２、ヨ-82・83 間の畔のⅥ層から採取した炭化物の年代値が 12 世紀半ばから 13 世紀半ばを示した。
３、Ⅲ～Ⅸ層までに含まれる遺物は 16 世紀代以前のものであった。
４、ヨ-82・83 にて認められた窪んだ地形は、少なくとも 14 世紀前半（上限）または 15 世紀前半（下限）には開口しており（上記１より）、16 世紀には埋没した（同３より）と考えられる。
５、本窪地は、後述する二の曲輪（殿舎）と埋没時期や埋没状況が類似することから、何らかの防御機能を有していた遺構が廃城に伴い埋没したものと想定される。

ヨ-82 Ⅵ層（基本層序Ⅲａ層？）から「広田上層タイプ」と考えられる貝符が出土した（第 44 集 308 頁第 116 図１）。また、当該区ではくびれ平底土器も多数出土した。従来、北谷城出土のくびれ平底土器は、当該土器の新段階にあたるフェンサ下層式とみられてきたが[註1]、広田上層タイプの下限年代は、くびれ平底土器古段階のアカジャンガー式土器期に概ね比定されることから、北谷城出土のくびれ平底土器の年代観を幅広く捉えておく必要がある。

註１.『北谷城』（北谷町文化財調査報告書第１集、1984）

3）石切り場

2019（令和元）年度に実施した踏査調査において、石切り場の可能性がある場所が３か所確認された。うち２か所は、一の曲輪より更に東にある米軍の貯水タンク付近に位置する。

１か所目は戦後に分断された尾根の間近にあり（丘陵の東端）、幅 12 ㎝、長さ１m程の明瞭な窪みが石灰岩の表面に残っている。庇状に発達した石灰岩を割り取るための人為的な加工痕と思われる。丘陵東端の標高は、平成期の地形図で約 23 mと戦後間もなく米軍が作成した地形図と比較すると５m以上低くなっている。よって、当該石切り場は戦後のものである可能性が高い。

２か所目は１か所目よりも西側に位置しする。上面観はクランク状を呈し、石灰岩が垂直に面取りされている。時期は不明である。

３か所目は堀切跡より南側の斜面部に位置する。現地踏査を行った大城逸朗氏より「斜面から石を取ることによって、平場を持つ階段状の地形になったのではないか」と所見を頂いた。時期は不明である。

また、同氏からは、前述した堀切跡の南側に見られる直角の抉りとその南側斜面に見られる巨岩の落石（第 44 集８頁第７図参照）について、次の所見を頂いた。

①直角の抉り近辺は、石灰岩と砂岩の不整合部の風化による削剥によるノッチである。
②この巨岩は、堀切南側岩壁の抉り箇所　からの落石と考えられる。
③この巨岩は、堀切跡の箇所から水が流れ込んで風化し自然に剥がれ落ちたのでは。

なお、堀切跡の北側に見られる直角の抉りについては、自然作用によるものか不明である。

3．二の曲輪及び出入口

二の曲輪・出入口の調査

調査次	調査実施グリッド	面積
第１次	K-90 ～ 92、L-91・93、O-96、P-100、V-101	2 m×2 m×8＝32 ㎡
第３次	M-93 ～ 95、N-95、O-93 ～ 95・97 ～ 99、P-95・96、Q-95 ～ 98、R-95 ～ 100	2 m×2 m×22＝88 ㎡
第５次西側	S-92 ～ 98、T-98、U-99 ～ 104、V-99・100、W-100、X-100 ～ 102、Y-100 ～ 103、Z-102・103	2 m×2 m×26＝104 ㎡
第５次東側	R-111・112、S-111・112、T-110 ～ 112、U-110、V-107・109	2 m×2 m×10＝40 ㎡
第６次	W-98・99、X-96 ～ 99、Y-96・99、Z-99 ～ 101	2 m×2 m×11＝44 ㎡

※第５次東側は測量のみの面積も含む。第６次は第５次と重複する部分を除外した。　**合計面積：約 308 ㎡**

A 群　Ⅰｂ層及び礫堤除去後に検出された遺構

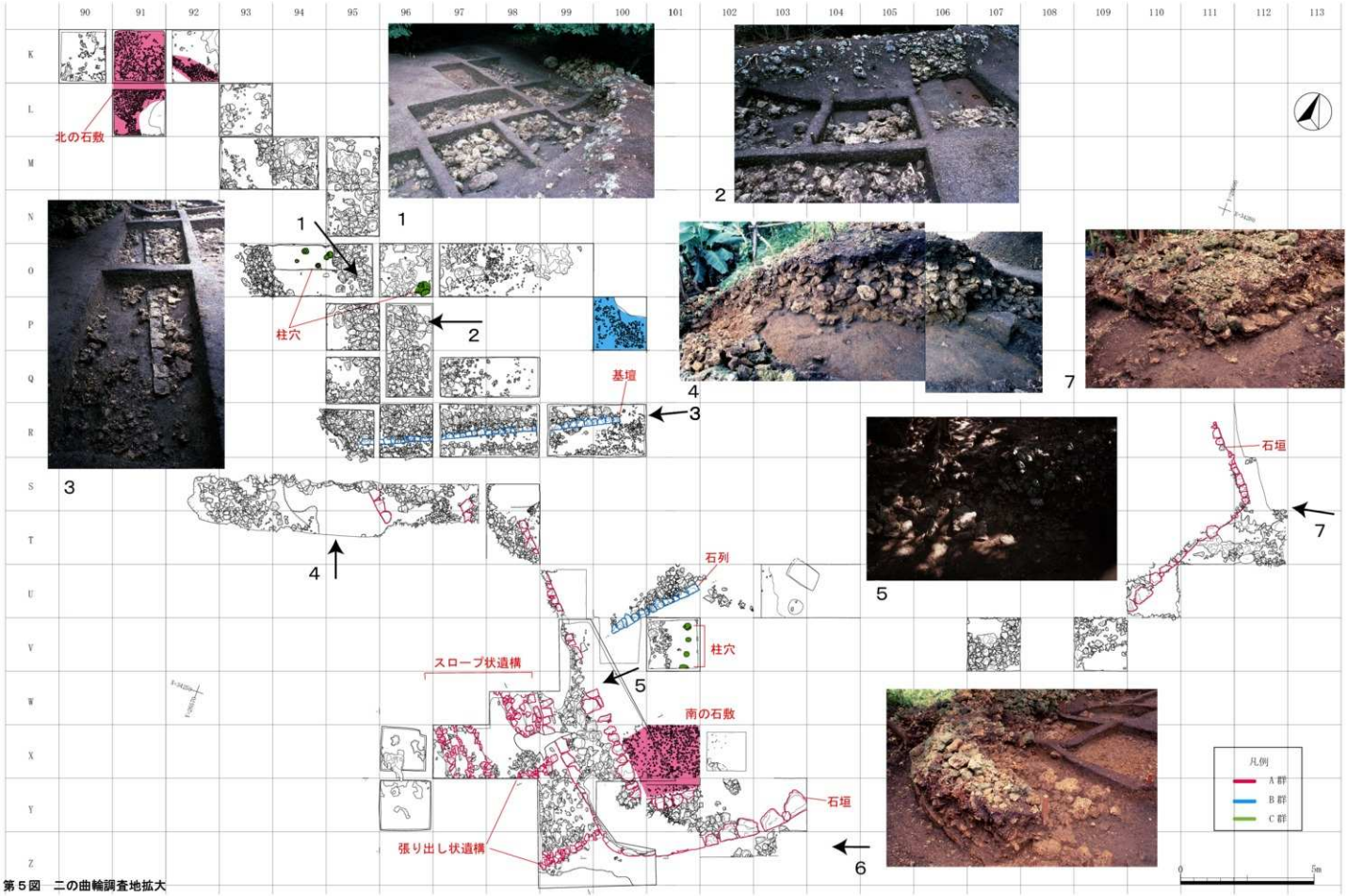
A-１　石垣

二の曲輪南東・南西面の一部にて、曲線を描く石垣のコーナー部分を検出した。上位には多量の礫が残存しており、これらの除去後に切石の根石を検出した。従って、少なくとも基礎構造は切石であったということ及び、この根石上にはある程度の石造構造があったといえる。W・X-99 付近では、内外壁の根石間が摩滅した礫で平坦面を成していた。調査時の所見として、時期は定かではないとしつつも、同平坦面が通路として利用されていたと断定している。また、W-100 付近の根石は精緻に加工されたサンゴ石が用いられており他の根石と趣を異にする。当該地は後述するスロープ状遺構との関連等から、ある時期において出入口であったと考えられる。石垣内側の様相から、このコーナー部分はⅢｂ層と連動して構築されたことが分かっている。

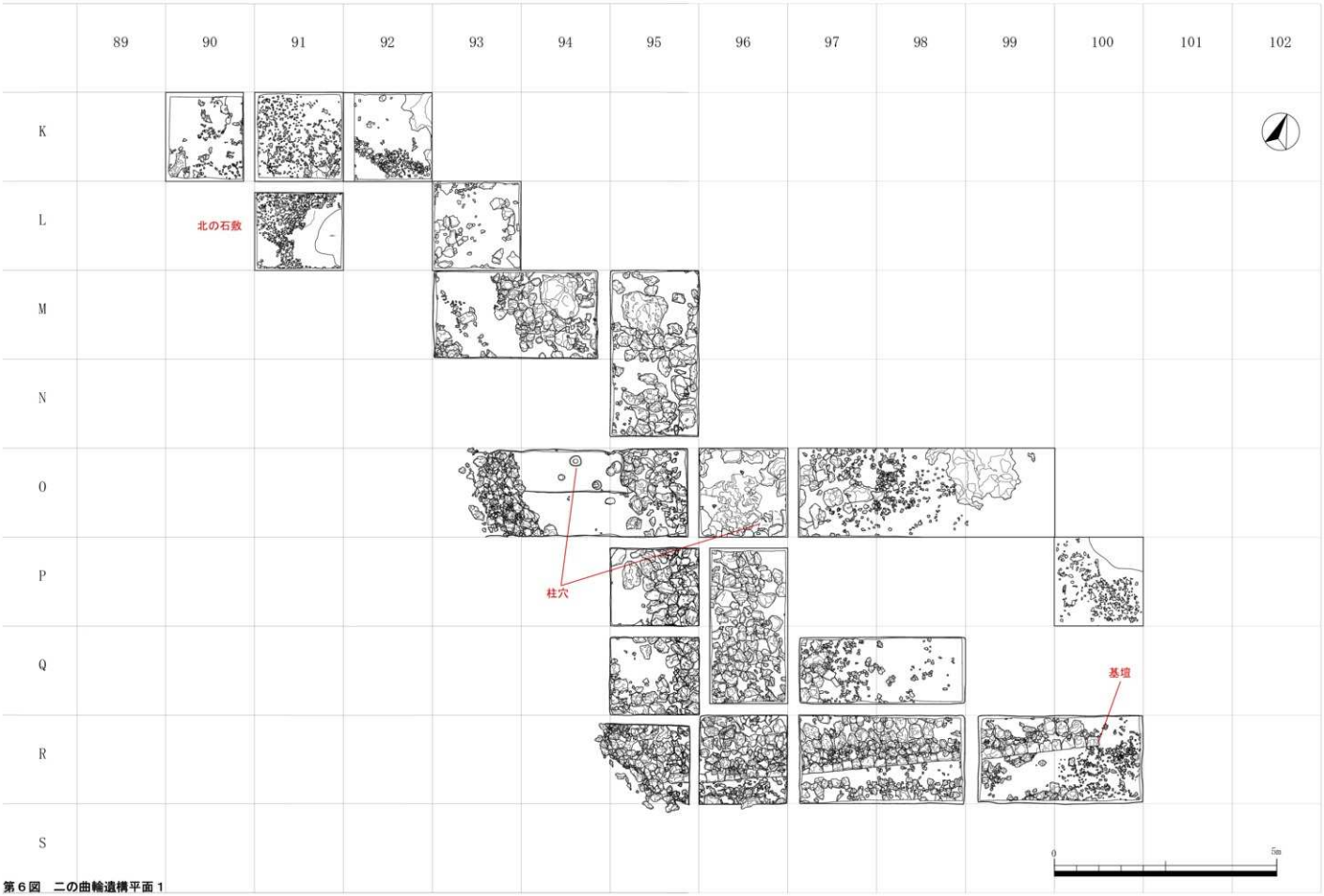
S-95・96 では精緻に加工された根石が検出された。外壁面のみ確認されており、先述の根石と平行するも西へ約３mのズレがある。

A-２　出入　　口に伴うスロープ状遺構

二の曲輪外となる W-98、X-97 ～ 99 グリッドにおいて、根石に対して直角方向に延びるスロープ状遺構が検出された。この傾斜を下ると三の曲輪の平場に至る。スロープ面には等高線に平行する礫の配置が認められるため、出入口に伴うスロープもしくは階段状の遺構と想定される。

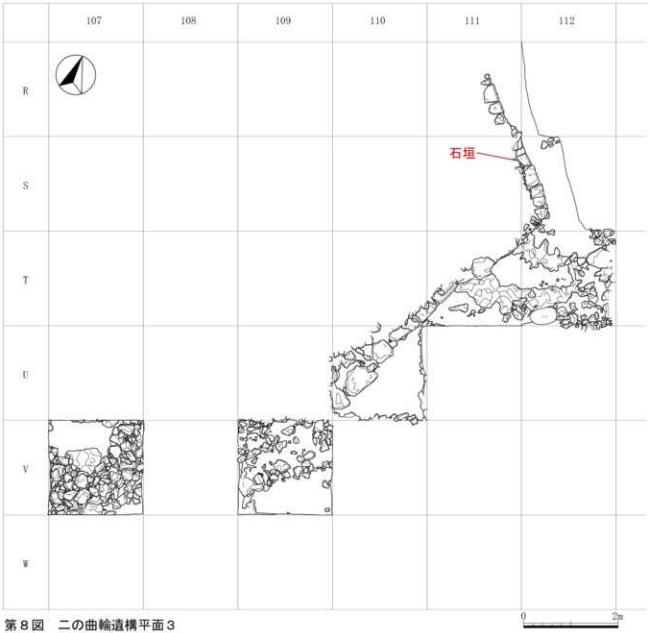


第５図　二の曲輪調査地拡大



第６図　二の曲輪遺構平面１

第７図　二の曲輪遺構平面２



第８図　二の曲輪遺構平面３

A-３　張り出し状遺構

二の曲輪外となるY・Z-99グリッドにおいて、根石に対して直角方向に延びる石灰岩の石列がⅢc層上で検出された。石灰岩は未加工で並びも不規則であるが、先述の石垣及びスロープ状遺構との位置関係から、何らかの関連遺構と考えられる。

A-４　北の石敷

二の曲輪北側K・L-91・92グリッドにて石敷が検出された。戦時中の空襲による着弾跡によって欠失する部分もあるが、概ね北西－南東方向に延びているように見える。礫は破砕されたものであるため、角張っているものが殆どで、発掘道具では突き刺せぬほど密集している。

この石敷以下は掘削していないため、どのくらいの厚さをもって堆積しているかは不明である。しかし、北側のすぐ近くまで露出している石灰岩が迫っており、石敷のない東側にも大きな石灰岩の岩盤が検出されているため、それほど厚くないことは十分に予想される。この石敷は、グスクが機能していた時期に屋外地面をなしていたものと考えられる。

A-５　南の石敷

石垣の南コーナー部分の内側、W-100、X-100～102、Y-101グリッドにおいて石敷が検出された。この礫面は、石垣南西隅付近に充填された基本層序Ⅲb層の上面に分布している。北の石敷同様に、この石敷は、グスクが機能していた時期に屋外地面をなしていたものと考えられる。

B群　Ⅲa層掘削中に検出された遺構

B-１　石列

V-100からU-101グリッドにかけて、長さ3.3ｍほどの南面する切石の石列を検出した。当時の調査ではヒンプン状遺構と仮称されたが、後述する基壇（殿舎跡）の方向には平行せず、石垣（根石）に対して直角方向に延びているスロープ状遺構の延長上に配置されていることから、出入口に関連した構造物である可能性がある。

B-２　基壇（殿舎跡）

R-95～100グリッドにかけて、長さ9.8ｍほどの南面する切石の石列と、その北東側に広がる礫群を検出した。石列と石垣は直角平行の関係にないが、二の曲輪内で主要施設の建物が存在可能な区域は他に認められないことや、当該範囲内から遺物の出土量が多いこと、南面以外で石列は認められないが、地形的に低くなる南西側を充填するように礫群が検出されていること等から、何らかの建物の基壇と考えられる。礫群の下方に多量の炭や灰、焼石、焼土等が認められ[註1]、出土遺物にも被熱痕のみられるものが多かった。これらは火災があった可能性を示している。

二の曲輪西面には、石垣の裏込と考えられる礫群が本遺構と重複していた。本来の城壁は礫群よりやや西側にあったと思われる。

註1.『北谷町史 第一巻 通史編』（北谷町教育委員会、2005、P217）。

C群　Ⅲ層除去後に検出された遺構

C-１　柱穴（ピット）

地山面の複数個所にて柱穴を確認した。確認された柱穴の多くは、Ⅲe層除去後に検出されている。Ⅲe層より上層にて何らかの遺構が認められた箇所では遺構検出面で掘り下げを止めているため、調査区全体における地山面での柱穴の分布状況は不明である。

４．三の曲輪

三の曲輪の調査

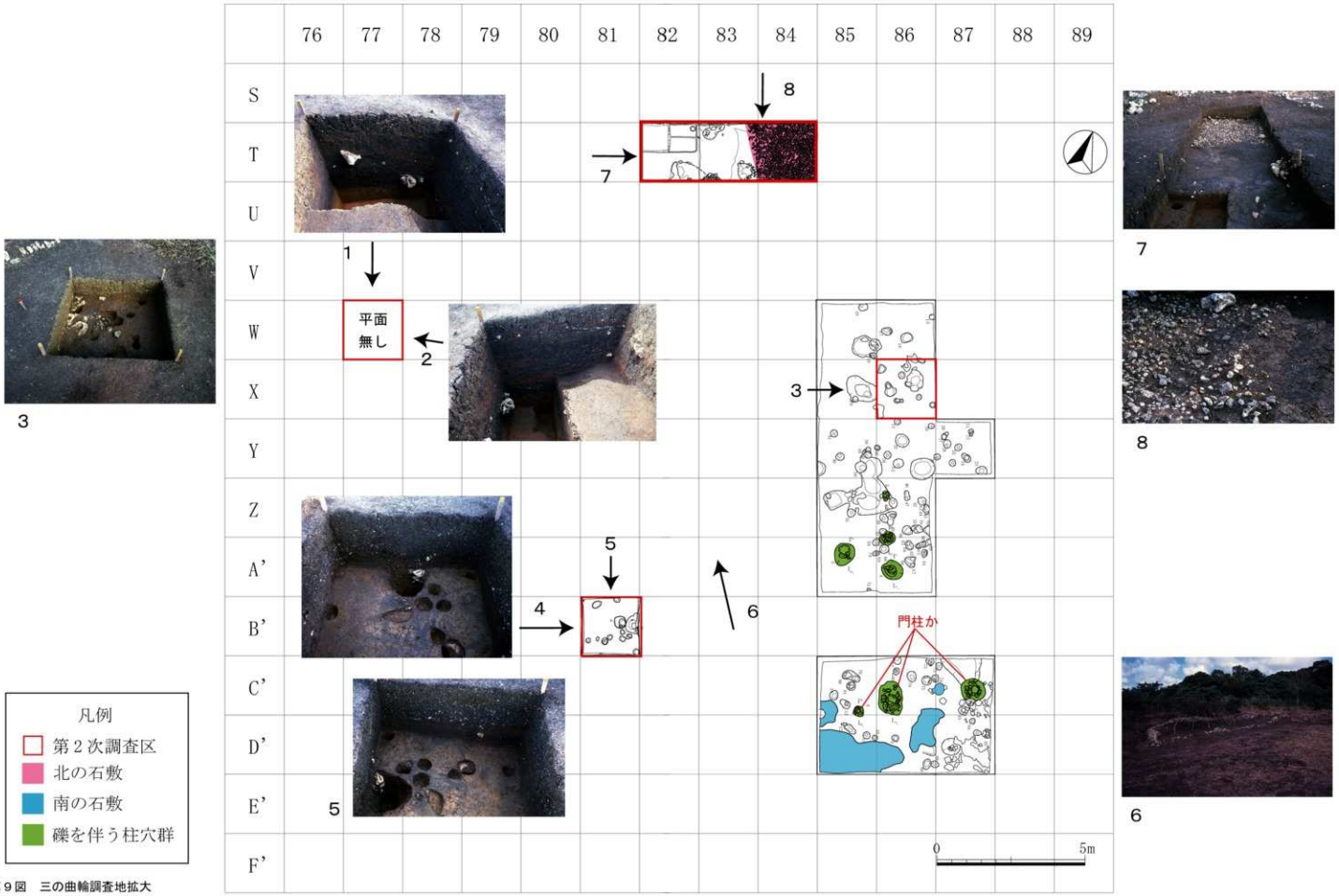
調査次	調査実施グリッド	面積
第2次	T-82～84、W-77、X-86、B'-81	2m×2m×6＝24㎡
第7次	W-85・86、X-85、Y-85～87、Z-85・86、A'-85・86、C'・D'-85・86	2m×2m×14＝56㎡

※第7次は第2次と重複する部分を除外した。　　合計面積：約80㎡

１）北の石敷

三の曲輪中央部には、方形にめぐらせた野面の石積みが露出していた。第２次調査でこの部分を掘り下げた結果、拳大の石灰岩を用いた石敷と祭祀に伴う香炉・酒器類が見つかった。調査以前から三の曲輪には拝所「殿（とぅん）」があるとされていたため、当該遺構が『琉球国由来記』に記載されている「城内之殿」と考えられる。なお、石敷の西側は、南北軸に直線的なラインを持って途切れる。

この拝所がいつからこの場所にあったのか詳細は不明である。しかし、石敷を覆う土層にはⅢa層期に相当するものが認められないこと、二の曲輪に正殿があるならばこの三の曲輪は「御庭（う



第９図　三の曲輪調査地拡大

なー)」に相当したであろうこと[註1]、「城内之殿」に関わる祭祀である「稲二祭」は第二尚氏王統以降に広がった可能性があること[註2]等から、今後の調査で時期の特定も可能になると思われる。

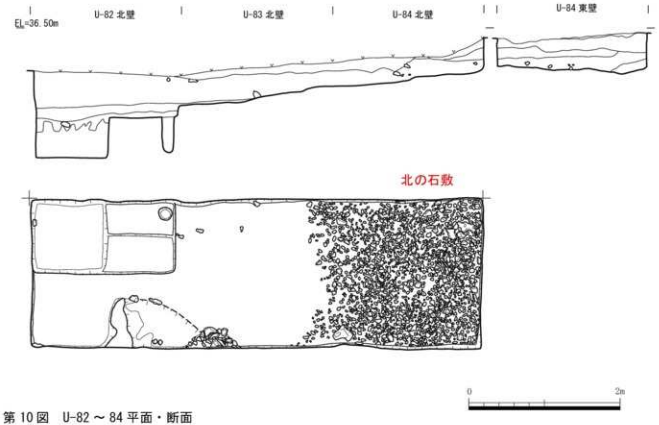
註1.「北谷城史跡基本構想策定審議会議事録（平成5年7月2日）」(『北谷城史跡整備基本構想』北谷町教育委員会、1994)。

註2.「北谷城史跡基本構想策定審議会議事録（平成4年12月17日）」(『北谷城史跡整備基本構想』北谷町教育委員会、1994)。

2）南の石敷及び「礫を伴う柱穴群」

第7次調査において、サンゴ礫と貝殻で構成される石敷及び礫を伴う柱穴群を検出した。いずれも地山であるマージ上面に構築されていた。石敷はその直上まで攪乱を受け分断されていたが、本来は一連のものであった可能性がある。

礫を伴う柱穴は7基あり、遺構内部の中から上部に礫が見られる。また、上部の径に一回り大きな掘り込みをもつものが多い。柱穴の覆土はⅢa層に類似する。平面図上、これら礫を伴う柱穴群はほぼ直角・平行方向に規則性をもって配置されているように見え、何らかの構築物の存在が想定される（第44集105頁第40図）。



第10図　U-82～84平面・断面

図版4　U-82東壁

第7次調査の報告では、Z-86、A'-85・86で検出された礫を伴う柱穴を建築遺構、C'-85～87で検出された同柱穴を門柱とし、石敷を伴う門状の遺構と想定している。門柱と想定されるC'-86・87の柱穴間に見られる石敷は、柱穴が構成する施設に対応する通路状のものと考えられる。

3）南のピット群

前述の石敷・柱穴が検出された第7次調査区にて、礫を伴わないピットが74基検出された。ピット群の一部にはⅡ層起源の覆土をもつものもあることから、異なる時期のピットが同一面で検出されたと見られる。ピット群全体を見渡した場合、平面上斜め方向に配置されているようにも感じられ、もしこの方向に沿った建物配置があったのであれば、先述の石敷・柱穴とは異なる軸で展開されていることになり、当該地区における空間利用の変遷が窺われる。ピット群間における新旧関係は断言しがたいものの、切り合い関係からより小径の方が新しい時期のものと考えられる。

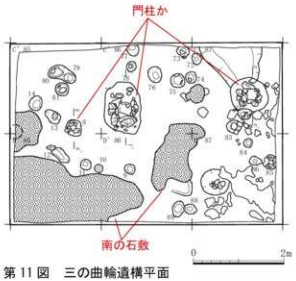
4）南の土坑群

第7次調査区にて、用途不明の土坑が12基検出された。覆土はⅢa層に類似する。

5）西のピット群

第2次調査区B'-81グリッドにおいて、大小計12基のピットを検出した。狭い範囲での調査であったため、各々の配置や関係性については不明である。Ⅲa相当層の直下からの掘り込みであるため、いずれもグスク時代の遺構と考えられる。

二の曲輪におけるピットは基本的にⅢe層期にものに限られるが、三の曲輪ではⅢa層期にもピットが確認されている。

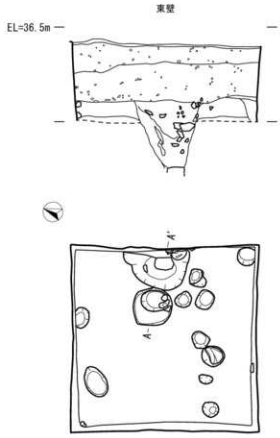


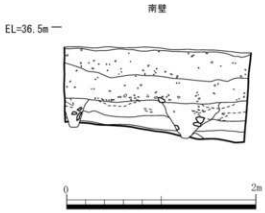
第11図　三の曲輪遺構平面

6）大規模な整地痕跡

第2次調査区W-77グリッドにおいて、幾重にも重なる整地の痕跡が認められた。整地層は厚いところで1.8mを測る。本グリッドは三の曲輪・四の曲輪の境界に近く、曲輪間の石垣の構築に伴う大掛かりな整地があったことが窺える。壁面に複数みられる掘り込みから、これら層群を大別することは可能であるが、整地の過程における一時的な痕跡と考えた。この整地層から多くの土器が出土したのに対し、青磁等の陶磁器類は僅少であった。

本整地層は、大掛かりな土木行為を実行できる人物の存在と、整地以後に按司等の居住・活動が始まったことを暗示しているものと思われる。





第 12 図　B'-81 平面・断面

図版５　B'-81 東壁

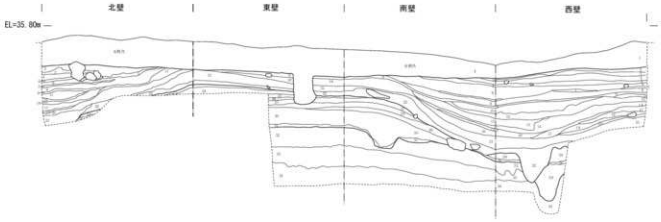
５. 三の曲輪北西端部

三の曲輪北西端部の調査

調査次	調査実施グリッド	面積
第 10 次	ナ -43、ラ -42 ～ 44、ム -43	1 m × 6 m × 2 = 12 ㎡ 1 m × 5 m = 5 ㎡ 1 m × 4 m = 4 ㎡ 2 m × 3 m = 6 ㎡

合計面積：約 27 ㎡

第 10 次調査は、舌状に延びる三の曲輪北西端部を対象とした。崖に面した北壁は野面積みが弧状に巡らされ[註1]、丘陵北崖に掘られた金満按司の墓に近い。この調査は 1994 年に沖縄国際大学考古学研究室の実習の一環として実施され、同年中に発掘調査概報が刊行された[註2]。引き続き本報告のための整理作業が行われ、トレンチ名や方角の間違いが発覚し、基本層序の名称変更等により混迷[註3]したようである。丘陵全体を覆うグリッドに調査区を載せると丘陵南側斜面に調査区がきてしまうため、本報告（第 15 図）では 1 グリッド分（5 m）北側にずらして図示した。具体的には、十字状の調査区の交点が第 10 次調査ではラ -43 グリッドに位置しているが、本報告ではナ -43 に配置した[註4]。当調査区からは、①元～明初の染付（酒会壺・梅瓶）、②多くの中国銭貨（五銖銭を含む）、③火災の可能性を示す多くの被熱遺物が得られ特筆される。①～③の調査成果と、下記の検出遺構等から、物見台や威信財を保管していた倉庫等、何らかの建物があったと推測され、北谷



第 13 図　W-77 断面

図版６　W-77 壁面（左：南壁、右：東壁）

城の中でもこのエリアがやや特殊な空間であったことが窺える。グスク時代の遺物包含層も複数確認できたが、他のエリアとの整合が難しかったため、Ⅲ 1 層・Ⅲ 2 層という上下 2 枚に大別した。

註 1．　知念勇氏の記述（『北谷町史 第一巻 通史編』北谷町教育委員会、2005、P218）。

註 2．『北谷城発掘調査概報－第 10 次発掘調査報告書－』（沖縄国際大学考古学研究室、1994）。

註 3．　当時調査に参加していた学生達が残した日誌等より。

註 4．　調査区を 5 m 北側にずらすのは、地形図と調査区の併合図である第 15 図のみで行った。

1）石垣

第 15 図ナ・ラ -42、ラ -43 グリッドの範囲で確認された弧状の石垣で、丘陵縁辺部に構築されている。調査時の遺構平面図が未確認のため、写真資料を基に推定した位置を第 15 図に破線で示した。

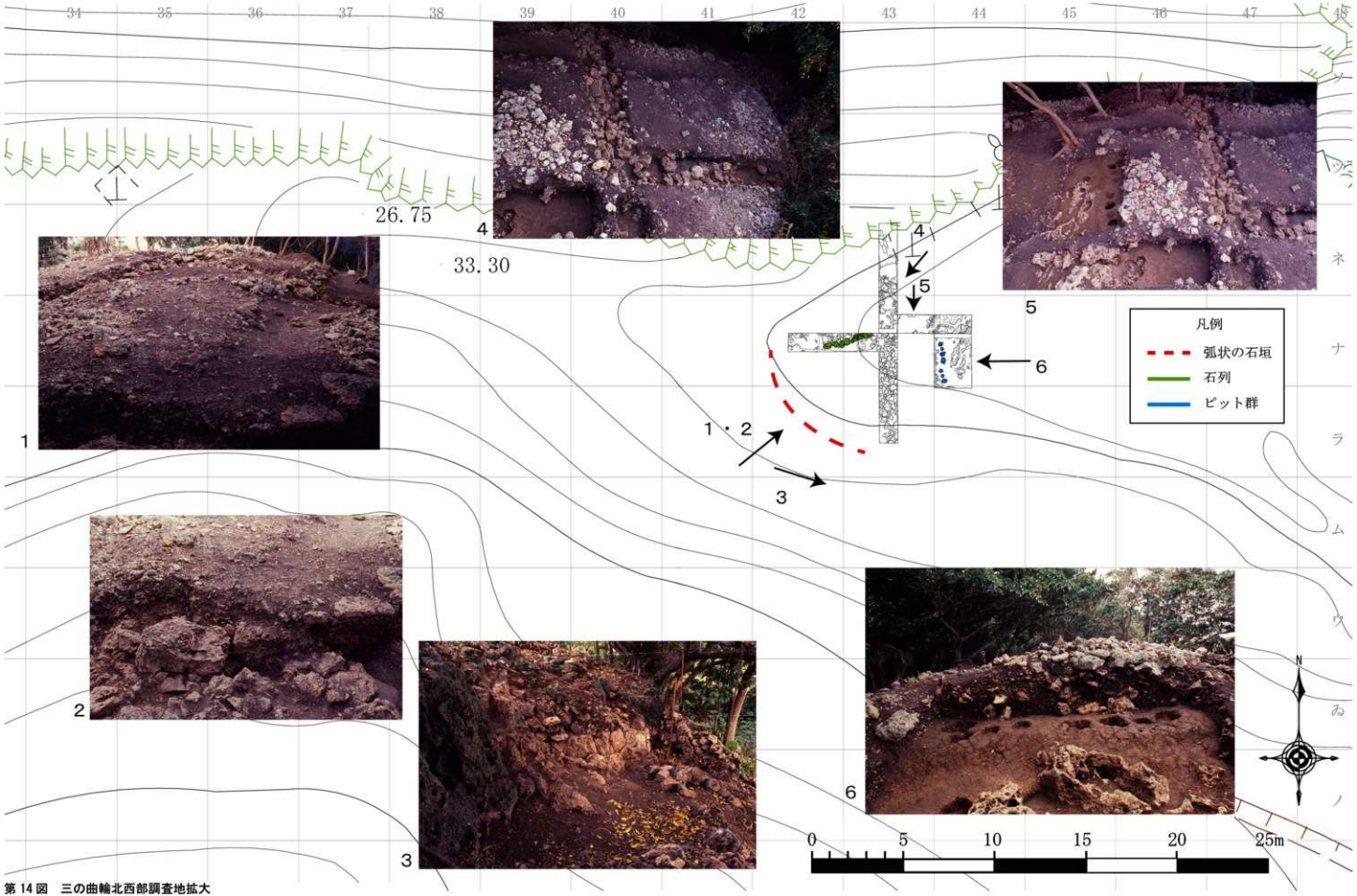
2）石列

Ⅲ 1 層掘削中に略東西に軸を持つ石列を検出した。前述の弧状の石垣に対して弦となるような、南面する石垣内面の根石と考えられる。大型の石を用いていることから、高さのある施設（物見台等の建物）があったと想定される[註1]。

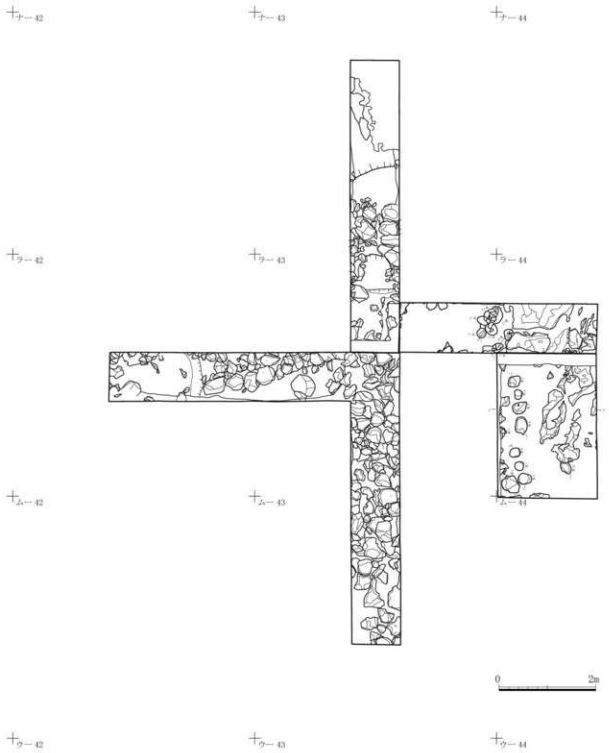
註 1．知念勇氏の記述（『北谷町史 第一巻 通史編』北谷町教育委員会、2005、P218）。

3）ピット群

地山面において、南北に軸を持ち、並んで配される数基のピットを検出した。石垣構築以前の遺構と考えられるが、出土遺物の帰属年代は 14 ～ 15 世紀とあまり古くはならない。石垣・石列と併せて当該地に建物があった可能性を示す遺構である。



第 14 図　三の曲輪北西部調査地拡大



第 15 図　三の曲輪北西部遺構平面

6．四の曲輪

四の曲輪の調査

調査次	調査実施グリッド	面積
第4次	L''-44、S''-44、Y''-47、M'・N'-55、M'・N'-60、O-40、P-32	2m×2m×9＝36 ㎡
第 11 次	サ-54・55	5m×5m×2＝50 ㎡

合計面積：約 86 ㎡

第 4 次調査においては、9 グリッド分の調査を行い、そのうち 1 か所からピット群が、2 か所（4 グリッド分）から南縁城壁の痕跡が検出された。第 11 次調査でも南縁城壁が見つかっており、城門から連なっているものであることが分かった。

1）城壁

サ -56 から西へ約 10 m延びる布積みの石垣を検出した。この石垣の検出は、第 11 次調査期間を過ぎてからのことと思われ[註1]、そのためか図面記録が残っていない（本石垣の推定位置を第 17 図にて緑色の直線で図示した）。第 4 次調査で検出された礫群は、平面図上この延長線上にあるため一連のものと考えられる。N' -55 グリッドから淡青色ガラス製勾玉が 2 点出土している。

丘陵南腹の通路からは、城門を通らないと直接この四の曲輪に入れないような構造であったと考えられる。そうであれば、塩川方面に懸門があった方が自然なあり方であるようにも思われる。

註 1．ネガフィルムの順番等からの推察である。

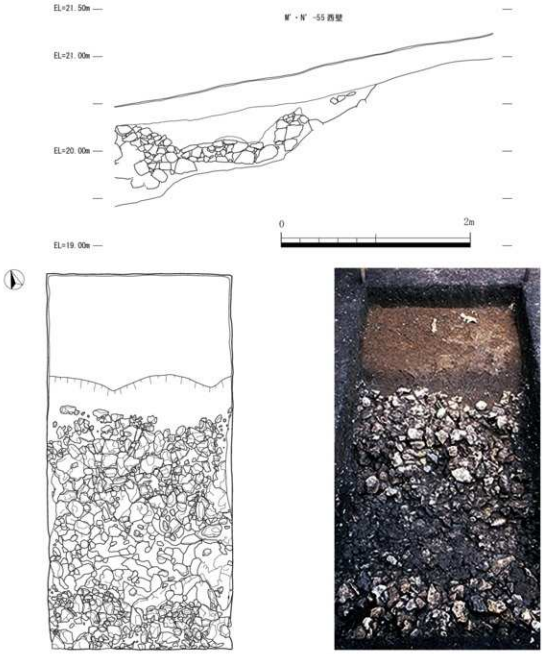
図版 7　四の曲輪南側城壁（南向きに撮影）

2）礫群

四の曲輪の南側斜面に設定した調査区（M'・N' -55）から礫群を検出した。周辺から切石は認められない。礫群は地山に似た赤褐色及び褐色土の上面に広がり、斜面下方にかけて礫量が増している。礫を覆う黒色土から中国産陶磁器を主体に沖縄産陶器が数点出土した。同黒色土は基本層序の Ⅲ a 層に相当するものと考えられる。礫群の上部は後世の耕作の影響を受けている。

3）ピット群

発掘調査では最西となる P-32 グリッドの地山面にて、6 基のピットを検出した。径は 20 ㎝程度、深さは 10 ～ 25 ㎝の小型を呈する。プランや帰属時期は不明である。



第 16 図　M'・N'-55 平面・断面

図版 8　M'・N'-55 平面

7．城門付近

城門付近の調査

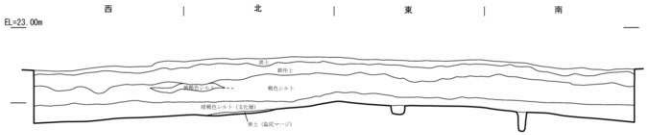
調査次	調査実施グリッド	面積
第 11 次	エ -55・56、テ -56・57、ア -56 ～ 58、サ -56	5m×5m×8＝ 200 ㎡

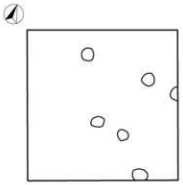
※測量のみの面積も含む。　　合計面積：約 200 ㎡

第 11 次調査区にて、城門跡及び城門に通じる階段状の通路を検出した。城門には門扉があったと考えられ、それを境に東（外）→西（内）という構造になっていた。便宜上、門外から見て、①城門右側、②城門左側、③城門外側の通路、④城門内側の通路、と分けて記述する。

①　城門右側

テ -57 グリッドにおいて、切石で構成される直角面とほぞ穴を有する切石を検出した。直角面における平面規模は、東面約 2.2 m、南面約 3.0 m を測る。東面では、北側の岩盤上方にも切石が認





第 17 図　P-32 平面・断面

図版 9　P-32 平面　0　2m

められ、自然岩盤をうまく取り込んで構築されている。岩盤の上方、下方にある切石の高低差は約 2.5 m あり、これらは城門壁の外面をなすものと考えられる。南面では、中央部から南側に突き出た形でほぞ穴を有する切石が位置している。同切石は、長軸 60 ㎝、短軸 40 ㎝を測り、すぐ東側に L 字形の空間が認められる。これらは門扉に伴うものと考えられる。

②　城門左側

城門右側で見つかった L 字形の空間から南側へ約 2 m の場所（ア -57 グリッド内）にて、礫の無い空間が認められた。①の城門右側同様、門扉に伴うものであるならば、門の幅は約 2 m となる。これら平場に構築された城門の南側では大量の礫がみられ、斜面をなしている。斜面下部の礫下からはブルーシートが確認できるため近年積まれたものと判断されるが、後述する石垣に伴う裏込であった礫を発掘調査で取り除き、当地に置いた可能性も否定できない。礫の西側では、南北に長さ 7 m[註1] を有する布積みの石垣が検出された。同石垣は城門の内壁面にあたるものと想定される。

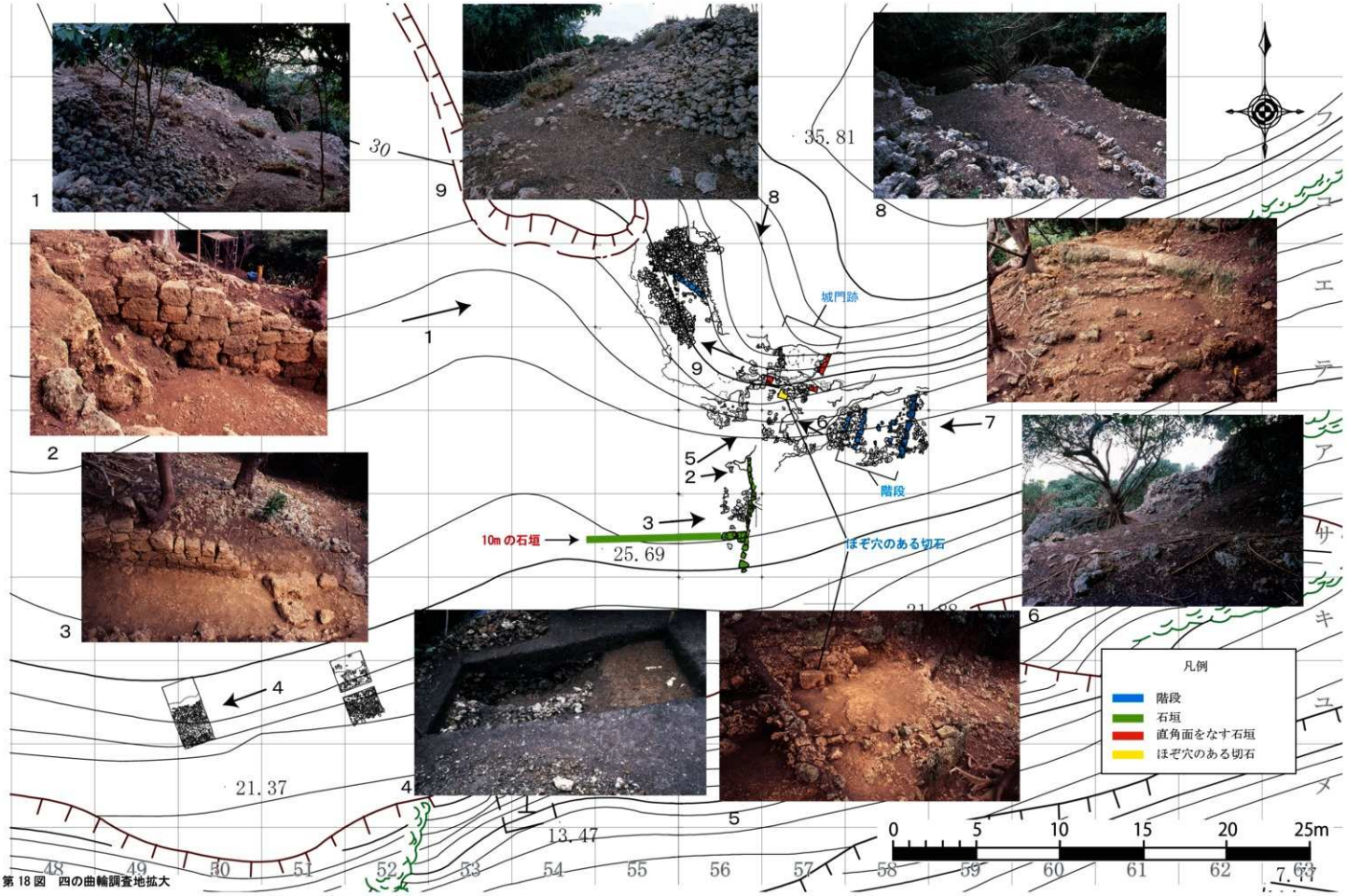
註 1．第 17･20 図で石垣の長さが異なるが、別の時期に作図したことによる。ここでは、より長く図化されている距離を示した。

③　城門外側の通路

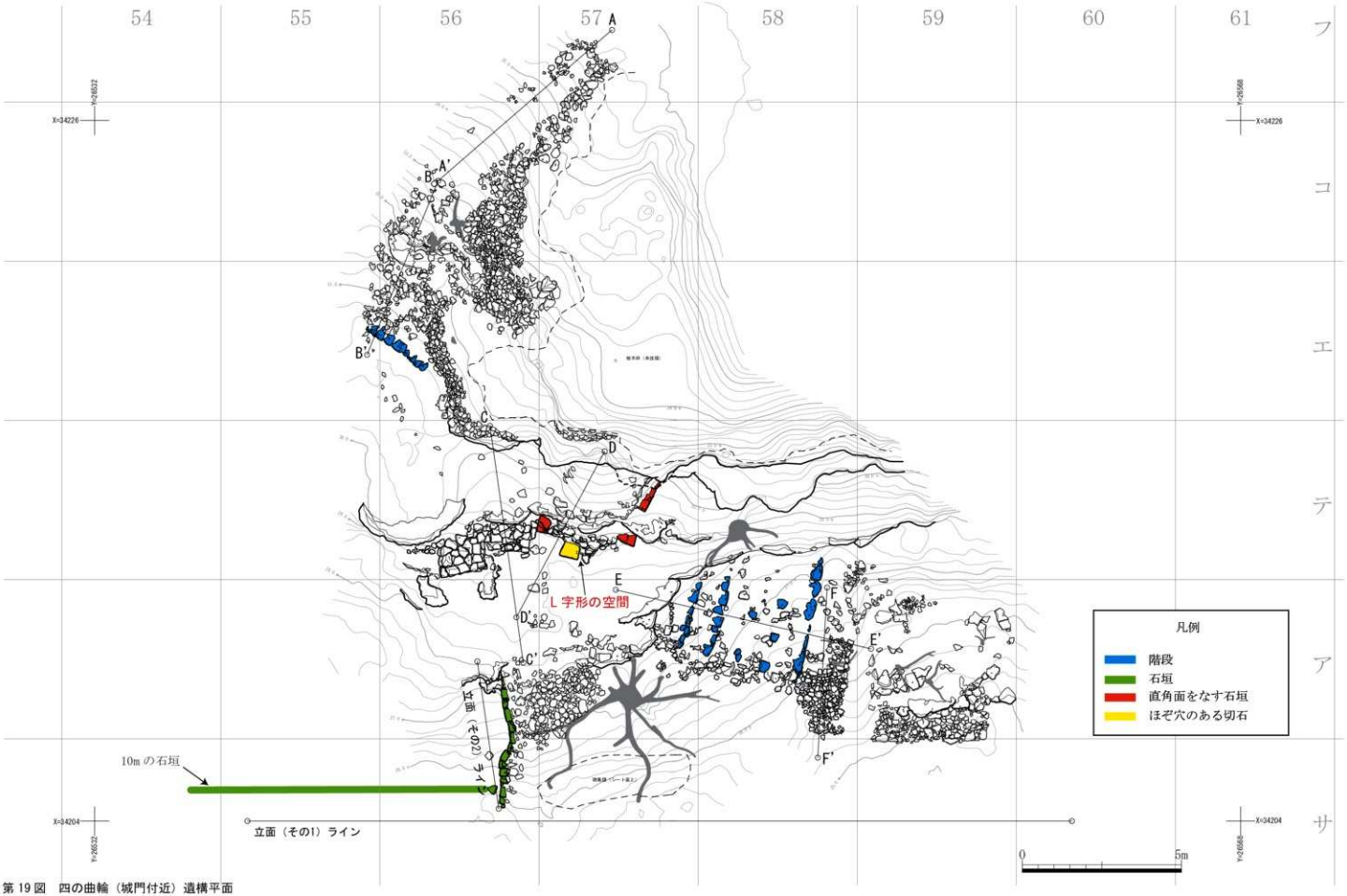
ア -57・58 グリッドにて、城門に真っ直ぐ登る階段を検出した。城門に最も近い段は自然岩盤を利用しているが、その他は石灰岩やサンゴ石の切石を用いている。5 段確認された階段は登るにつれて横幅を減じ、最下段は約 3.7 m、最上段では約 2 m を測る。中位の段は石灰岩やサンゴ礫の残りが悪く、上位及び下位の段は比較的残りが良い。1 段当たりの比高差は 15 ～ 25 ㎝となっている。

④　城門内側の通路

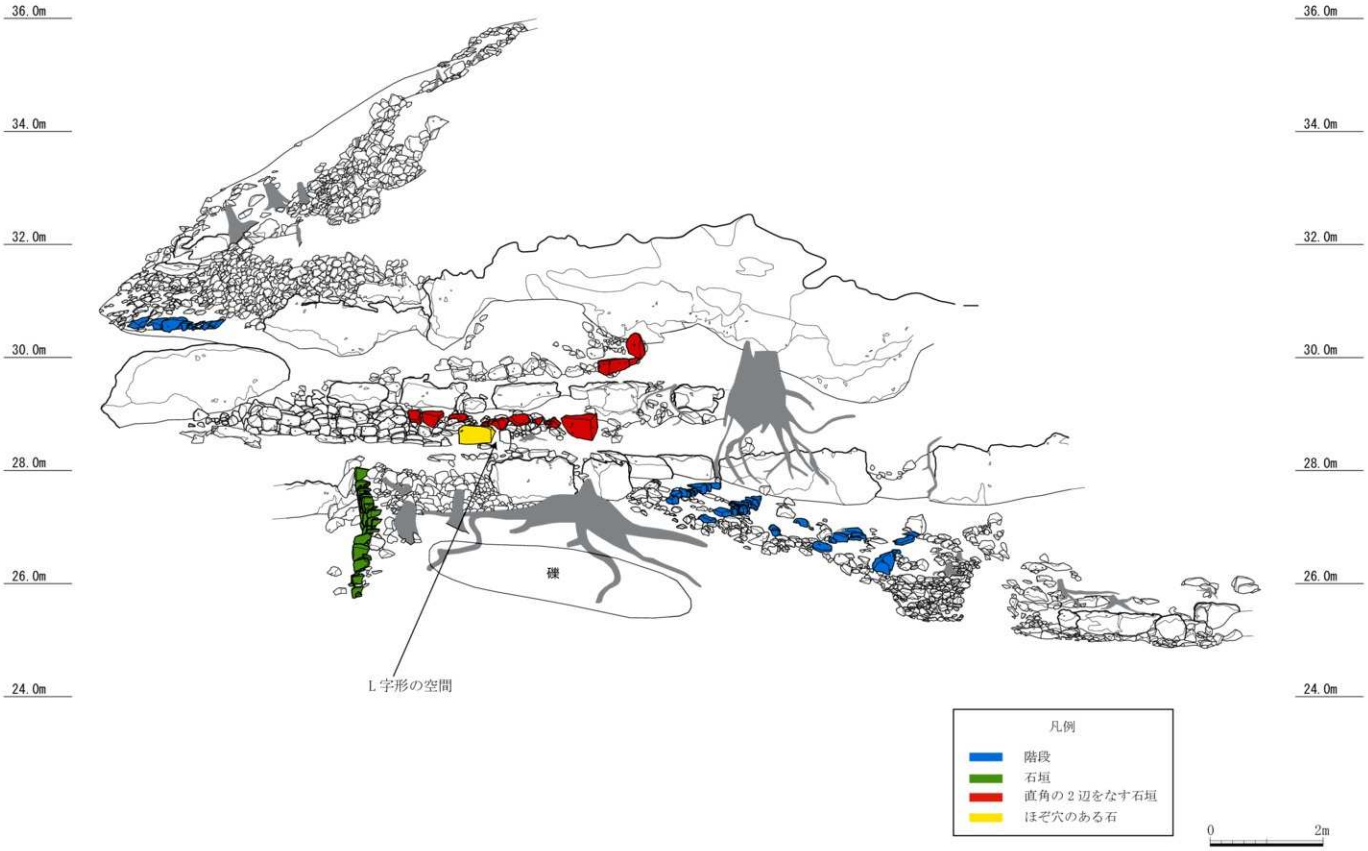
城門から北西へ離れたエ -55・56 グリッドにて、三の曲輪方向に登る階段と考えられる石列を検出した。石列の下方（テ -55・56）には著しく摩滅した平坦面をもつ岩盤があり、階段的機能を有する一連のものと考えられる。テ -56 で整然と積まれている石の下にはブルーシートが確認でき、②の城門左側で記述した大量の礫同様、近年の所産と判断される。



第 18 図　四の曲輪調査地拡大



第 19 図　四の曲輪（城門付近）遺構平面



第20図　四の曲輪（城門付近）遺構立面

第Ⅳ章　まとめ

主な遺構には、石垣や石列、基壇（殿舎跡）、建物跡、城門跡（門状遺構等）、石敷、張り出し状遺構、堀切跡、大規模な整地痕跡、柱穴（ピット）、水溜状遺構、礫群、石切り場等がある。これらの遺構の概要について記述する。

石垣

一から三及び四の曲輪の一部で石垣が確認された。一の曲輪では、大量の礫とその下に厚さ９ｍにも及ぶ東壁（根石）が検出され、堅牢な石垣の存在が明らかとなった。二の曲輪では厚さ２ｍを測り、西壁において、通路と想定される平坦面（W・X-99 グリッド）が確認されている（通路については以下「城門跡（門状遺構等）の項目でも述べる）。三の曲輪は北西端部の縁辺部にて弧状の石垣が確認された。四の曲輪では、城門左側の城壁内面から直角方向に折れる形で、西へ延びる約 10 ｍの布積み石垣を検出した。

総じて言及できることに、切石を用いた布積みはごく一部で、地上部分で現在確認できる石垣のほとんどは野面積みとなっている。これら野面積みの基礎部分には切石の根石が残っていることから、元々は布積みであった石垣の面石が取り去られて裏込石が崩れたものと解され、一部米軍や町教育委員会の調査により動かされた経緯はあるものの、本来の石垣や根石の位置を示唆していると思われる。なお、二の曲輪西壁に現存する野面積みは、根石から概ね１ｍ程度の高さを有している。

石列

二の曲輪、三の曲輪北西端部で石列が確認された。二の曲輪では V-100 から U-101 グリッドにかけて切石の石列が検出された。これは調査当時、ヒンプン状遺構と仮称された石列であるが、後述する基壇（殿舎跡）の方向とは平行しないこと、二の曲輪外側で確認されたスロープ状遺構との位置関係から、出入口に関連した構造物の可能性がある。三の曲輪北西端部で確認された石列は、後述する基壇（殿舎跡）に関連する遺構と推測される。

基壇（殿舎跡）

二の曲輪（R-95 ～ 100 グリッド）にて一直線上に配された切石をⅢ層中で検出した。切石上面のレベルは 38.0 ～ 38.2 m。二の曲輪の石垣とは軸を異にし、残存する石垣を単純に北へ延長した際、基壇と交差することになる。そのため、①石垣と基壇には時期差がある、②石垣と基壇が両存する場合、石垣は直線的ではなかった、のいずれかが考えられるが、現在のところ不明である。他のグスク同様、北谷城における二の曲輪も按司の居所であったと思われ、同基壇は殿舎に伴うものと判断される。Ⅲ層の上部は近現代の耕作によって攪乱されているため礎石の有無については不明である。基壇周囲から被熱した青磁、白磁、褐釉陶器等が 300 点以上出土しており、これらの遺物で所産時期が 16 世紀まで下るものは認められない。

建物跡

三の曲輪北西端部にて検出した。三の曲輪は北西部が西へ舌状に延びる地形をしており、縁辺部にて弧状を呈する根石、それに対し弦となるような石列が確認されている。根石内側（東側）のマウンド部分を掘り下げたところ、南北に軸を持つ柱穴の並びが地山上面で検出された。当地から、威信財となる貿易陶磁器の他、武具や銭貨、植物遺体等が集中して出土したため、何らかの建物があったと想定された。物見台や倉庫等の存在が考えられる。周辺には石垣の裏込石と思われる大小様々な礫が広がっている。突出した地形から白比川以北を一望でき、崖下には金満按司の墓が位置することなどから、同地は北谷城の中でもやや特異な空間だったと思われる。

城門跡（出入口・門状遺構等）

二から四の曲輪にて城門跡（１か所）及び門の存在が窺える場所（３か所）が確認された。

二の曲輪南西側では、W・X-99 グリッドにて通路と想定される平坦面が確認され、二の曲輪の出入り口と想定された。また、W-98、X-97 ～ 99 グリッドでは石垣の根石に対して直角方向に延びるスロープ状遺構が認められており、出入口に伴う何らかの遺構と考えられる。

三の曲輪南側では、礫を伴う柱穴群と石敷きが確認された。これらは、第７次調査の報告において門状遺構とされており、石敷きは門に伴う通路の可能性がある。

三の曲輪北西端部より西へ延びる狭小な尾根では、尾根の北崖直下に位置する五の曲輪から梯子を掛けて懸門とするのに適した地形が認められた。

四の曲輪南東側では城門跡が確認された。残存状況から想定される城門の規模は、高さ 2.5 m、城壁の内外面の幅は 3.0 ｍを測る。門は東に向いており、北側は崖に接する。城門跡の南方向へは布積みの石垣が７ｍ程延びており、途中で西へ延びる石垣も確認されている。四の曲輪の城壁をなすものと考えられる。本城門跡は、地元の古老により「ノロ道」と称される道上に位置している。現在の地籍図には、麓から三の曲輪へ延びる里道があり、位置や形状がノロ道とほぼ一致する。これらの状況から、当該城門跡は北谷城における大手門であったと考えられる。

石敷

二の曲輪、三の曲輪で石垣が確認された。

二の曲輪では曲輪の北側と南側の２か所で確認され、どちらもグスクが機能していた時期の屋外地面であったと考えられる。

三の曲輪で検出された石敷も曲輪の北側と南側の２か所で検出されており、北の石敷については現在の場所に遷座する以前の「城内之殿」に伴うものと推測される。南の石敷については、礫を伴う柱穴群と共に確認されており、柱穴群との位置関係から通路としての利用が考えられる。

張り出し状遺構

二の曲輪の外側にあたる Y・Z-99 グリッドにて張り出し状遺構が確認された。根石に対して直角方向に延びる石灰岩の石列をⅢｃ層上で検出した。検出された石灰岩は未加工で並びも不規則であるが、先述の石垣及びスロープ状遺構との位置関係から、何らかの関連を持つ遺構と想定される。

堀切跡

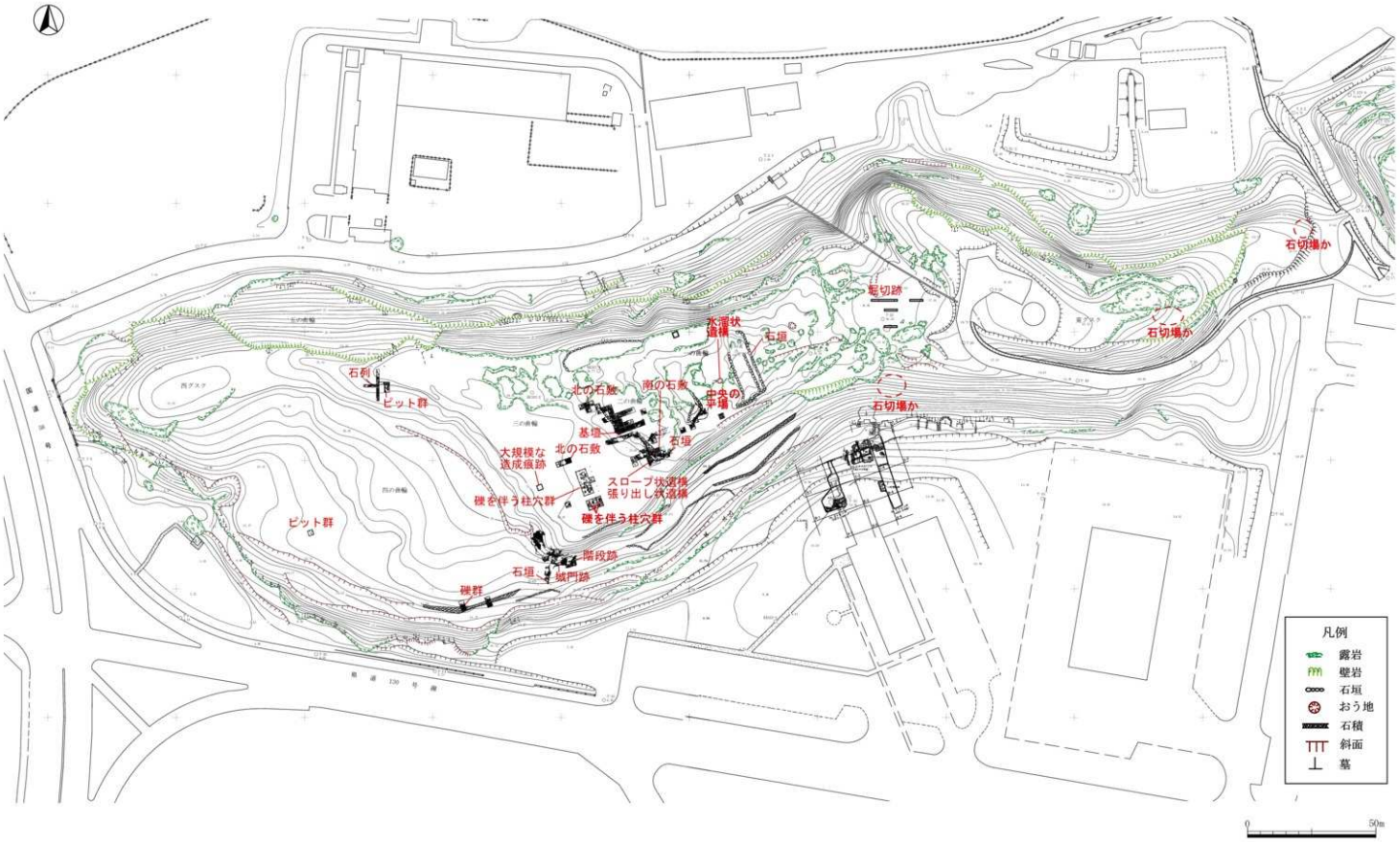
一の曲輪東側の斜面下部（ヨ -82 ～ 83 グリッド）にて東西に延びる尾根を縦断する形で堀切跡が確認された。地表面から最深部までの比高差は約１ｍと浅い。既往調査では堀切の可能性があるとしつつも、溝状遺構、窪地との解釈に留めている。本報告では、遺構の位置や埋没時期、埋没土層中に含まれる遺物の年代幅等から堀切跡と捉えた。床面に近いレベルから礫を伴うピットが検出された。ピット内の炭化物から、14 世紀前半から 15 世紀前半までの年代が得られた。

大規模な整地痕跡

三の曲輪 W-77・B’-81 グリッドにおいて整地の痕跡が確認された。

W-77 グリッドでは、地山由来と思われる赤色土が黒色土と互層となり、厚さ１ｍ以上にも及んでいた。層中には、グスク土器を主体に陶磁器類が僅かに見られた。土器付着炭化物の年代測定結果や遺物年代から、13 世紀後半から 14 世紀代に構築されたものと判断される。

B’-81 グリッドでも赤色土と黒色土の混在が認められた。W-77 グリッドと比べると、層厚は約


石列
ピット群
北の石敷
南の石敷
中央の平場
水溜状遺構
石垣
基壇
石垣
北の石敷
大規模な造成痕跡
スロープ状遺構
張り出し状遺構
礎を伴う柱穴群
礎を伴う柱穴群
ピット群
階段跡
石垣
城門跡
礎群
駐車場
石切場か
石切場か
石切場か
凡例
露岩
壁岩
石垣
おう地
石積
斜面
墓
0
50m

第21図　遺構全体

40㎝と薄く互層をなしていないが、こちらも整地跡と考えられる。

これらの整地痕跡は丘陵上部に平坦面を設ける目的で構築されたものと思われ、東から西へ傾斜する本丘陵において、曲輪内のより西側ほど厚みを増すものと推測される。W-77グリッドの整地層がB'-81グリッドより厚いのは、曲輪内でより西側に位置しているためと判断される。

柱穴（ピット）

二から四の曲輪、東側の丘陵で柱穴（ピット）が確認された。

二の曲輪では、基壇の下部層及び地山上面で検出された。グスク時代のものと判断されるが、詳細な時期や性格は不明である。

三の曲輪南西部では、第２次及び第７次調査にて同じグリッド（X-86）を調査し、共に黒色土（基本層序のⅢａ層）掘削後の地山面でサンゴ礫を伴う柱穴群と、それらより一回り小さな小穴群を確認している。前者柱穴群の並びはやや規則性があり、７次調査時には、周辺の石敷き遺構とセットで門状遺構として捉えられている。

三の曲輪北西部では、建物に伴うものと考えられるピットが検出されている。

四の曲輪では、P-32グリッドの地山上面においてピットを確認しているが詳細は不明である。

東側の丘陵では、ヨ-82・83グリッドの堀切跡とした窪地の掘削時にⅢ層（調査時）下でピットが検出された。検出状況等からグスク時代のものと想定される。

水溜状遺構

一の曲輪の中央部平場にて確認された。径約1.5ｍ、深さ約1.5ｍを測る円筒形の遺構が曲輪東側の岩盤窪みに形成されており、これが水溜めであった可能性があるとしているが、詳細は不明である。

礫群

四の曲輪の南側斜面に設定したM'・N'-55グリッドから礫群を検出した。礫を覆う黒色土から中国産陶磁器を主体に沖縄産陶器が数点出土した。同黒色土は基本層序のⅢａ層に相当し、礫群の上部は後世の耕作の影響を受けていると思われる。

石切り場

2019（令和２）年度、一の曲輪より更に東に位置する米軍の貯水タンク付近の踏査調査で２か所、東側の丘陵で確認された堀切跡より南側の斜面部で１か所の計３か所で確認された。

１か所目は戦後に分断された尾根の間近にあり（丘陵の東端）、幅12㎝、長さ１ｍ程の明瞭な窪みが石灰岩の表面に残っている。庇状に発達した石灰岩を割り取る際の加工痕と思われる。当地は戦後間もなく米軍が作成した地形図と比較すると５ｍ以上低くなっているため、本石切り場は戦後のものである可能性が高い。

２か所目は上面観がクランク状を呈し、垂直に石灰岩が面取りされていた。時期は不明である。

３か所目は、元々斜面だった地形が石を取ることにより平場を持つ階段状の地形になったとの所見が得られている。３か所とも全て人為的痕跡を有していると判断される。

文献資料２

各処祭祀
ヨシノ嶽　北谷村　神名、テンゴノ御イベ
城内安室嶋之嶽　同村　神名、イシラゴノ御イベ
北谷巫火神　前城村
右三ケ所、北谷巫所。
年中祭祀
北谷城内之殿　北谷村・玉代勢村
稲二祭之時、花米九合完、五水八合完（此時、朝神・夕神、二度）神酒一完（此時、惣地頭供物、按司同断）花米九合完、五水四合完（此時、朝神夕神二度）神酒一完（玉代勢地頭）花米九合完、五水四合完（此時朝神夕神二度）伝道大屋子・津嘉山大屋子・吉味大屋子。シロマシ一器、神酒壱完（麦、玉代勢村百姓中）神酒三完（麦、北谷村百姓中）供しゑ。北谷巫三テ祭祀也。

（出典資料）
『琉球国由来記』（一七一三年編纂）

文献資料３

神殿
北谷城内殿（在北谷邑）
嶽・森・威部
吉嶽（在北谷邑。神名曰「天呉威部」）
城内安室崎嶽（在北谷邑。神名曰「石良呉威部」）
火神
北谷巫火神（在「前城邑」）

（出典資料）
『琉球国旧記』（一七三〇年編纂）

文献資料４

８　改造池城橋碑文

［本文］
（表）
夫橋之為用也通険以便往来最不可不鞏固故貴石而不貴木此地沿海皆水田也中築長堤蜿蜒以通郡駅之前蔵歩其上襟懐灑然登覧橋上渓水自東而来奔流截路注入洟海曾架木橋権通往来謂之池城橋南行堤上三四十歩有小平橋四門総謂之城橋不過田水耳曾亦皆木也木豈持久之物哉暴路蛙欠不幾朽壊行者莫不危心至於地方人民荐苦於修造之役而其費用亦将不堪不但此也毎大風雨衝波騰浪激盪険壮木橋之危如畏薄氷之陥雖曰一時之艱難実係万象之憂患況且北方諸郡達於王都之正路乎国相臣尚容法司臣馬異才臣翁廷棟臣向承訓等慮及于此奏請改造石橋以便行路上允其請爰嘉慶二十五年庚辰九月佐阿天橋成随継其役而起工越明年辛巳正月十五日告成築建堅牢規模壮麗自此而後風雨無虞人馬歓騰履平平於王之路歌蕩蕩於王之道而施済之治於是乎益広矣茲有感於神禹治平之功謹勒其記於石永垂不朽云爾
道光元年辛巳三月上旬臣毛世輝奉　憲令恭記　臣馬執宏謹書

（裏）
督理各官役姓名併石惣大工脇大工等名字附録
奉行　武和心長嶺親雲上崇宣　向自明奥浜親雲上
朝常
筆者　武弘謨長嶺里之子親雲上崇永　向自彊奥浜里之子親雲上朝和　明世昌亀谷筑登之親雲上長祥　翁薄述
東恩納里之子盛顕　吉廷瑞湊川里之子孟順
石総大工　知念筑登之親雲上
石脇大工　比嘉筑登之　金城筑登之
雕工　比嘉仁屋

（出典資料）
北谷町史編集委員会　編集『北谷町史　第二巻資料編１　前近代・近代文献資料』
北谷町役場　昭和六十一年十二月十日

文献資料５

北谷間切神拝所
北谷村　三ケ所　東リ城御嶽・イリ城御嶽・ノロ社
玉代勢村　一ケ所　長老前御嶽
伝道村　一ケ所　山ガマ御嶽

（出典資料）
『沖縄島諸祭神祝女類別表』田代安定

参考資料

【文献資料】

1　『おもろさうし』第十五巻
　　五十四・五十五・五十六・五十七・五十八

2　『琉球国由来記』
〈出典資料〉
北谷町史編集委員会　編集『北谷町史　第二巻
資料編1　前近代・近代文献資料』
北谷町役場　昭和61年12月10日

3　『琉球国旧記』
〈出典資料〉
北谷町史編集委員会　編集『北谷町史　第二巻
資料編1　前近代・近代文献資料』
北谷町役場　昭和61年12月10日

4　改造池城橋碑文
〈出典資料〉
北谷町史編集委員会　編集『北谷町史　第二巻
資料編1　前近代・近代文献資料』
北谷町役場　昭和61年12月10日

5　北谷間切神拝所
〈出典資料〉
『沖縄島諸祭神祝女類別表』田代安定

文献資料1

●ちやうやおゑまのしがふし　一五ノ五四

一　きたたんに　おわる
　　うらの　世のぬしの
　　せざよ　めづらがて
又　けおのよかるひに
　　けおの　きやがるひに
又　大みきは　つくて
　　さかぐらは　たてゝ
又　かつれんに　おわる
　　おもひせざ　つかひ
又　なおが　ひきいちへ物
　　なおが　てづともの
又　いとおどしの　よろい
　　まいとおどしの　よろい
又　おれど　ひきいちへ物
　　おれど　てづと物

●きこえきみかなしがみ下の天とよみがふし
一五ノ五五

一　たらこ　にしとのよ
　　よかる　にしとのよ
　　およづぎしよ　よは　ちよわれ
又　にしの　世のぬしの
　　まさりきよは　なしよわちへ
　　おやつぎしよ
又　きたたんの　てだの
　　おもひくわは　なしよわちへ
　　けおの　よかるひに
又　けおの　よかろひに

●いちやはながおもろのふし　一五ノ五六

一　あんの　づのけたち
　　あんの　おやけたち
　　くもが　いきつきに
　　とよみゆわる　たかさ
又　きたたんの　てだの　なしよわちへ
　　ちやらもいは　げにしよ
又　ちやらもいが　げにしよ
　　きみしてだ　みちやる
又　おもひぐわの　げにしよ

●やぎからのぼるしちやたりやよろいがふし
一五ノ五七

一　きたたんの　世のぬし
　　あがひやし　うたは
　　世そわて　ちよわれ
又　そゝへの　つかい
　　あがひやし　うたは

●きたたんの世のぬしあがひやしうたはがふし
一五ノ五八

一　きたたんの　世のぬし
　　おさはつるぎ　さしよわちへ
　　さしやり　ふさいよわちへ
又　そゝへの　つかい
　　おさは

〈出典資料〉
『おもろさうし』第十五巻（一六二三年編纂）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちゃたんぐすく
書　　名	北 谷 城
副 書 名	総括報告書（補遺編）
巻　　次	－
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書
シリーズ番号	第 45 集
編著者名	松原哲志・太田菜摘美・照屋元子
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会
所 在 地	〒904 － 0192　沖縄県中頭郡北谷町字桑江 226 番地　ＴＥＬ　098 － 936 － 3159
発行年月日	2020 年（令和 2 年）10 月 6 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″		㎡・ha	
北谷城	沖縄県 北谷町 字大村 城原	473260		26° 18′ 18″	127° 46′ 10″	19840213 ～ 20191227	発掘面積 1,408 ㎡ 踏査面積 9.5ha	保存目的の踏査・発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
北谷城	城跡	貝塚時代後期		くびれ平底土器・石器・貝製品	東丘陵地区より貝札が出土
		グスク時代	城門・ピット群・基壇・石垣・堀切	グスク土器・カムィヤキ・白磁・青磁・染付・褐釉陶器・天目・銭貨・金属製品・骨鏃・植物遺体	三の曲輪北西地区より元染付が出土。火災により被熱したとみられる陶磁器類が出土
		近世～現代	溝状遺構・ヨシノ嶽（東御嶽）、北谷城内之殿、城内安室崎之嶽（西御嶽）・塹壕・蛸壺	沖縄産施釉、無釉陶器・陶質土器・本土産陶磁器・瓦	

要　　約

北谷城は東西約 500 m、南北約 150 m、標高約 44 mを最高地とする丘陵上に築かれている。かつては丘陵麓まで海が迫り、洋上に突き出た地形は天然の要害をなしていた。丘陵の南北に良港となる河口を持ち、防衛と交易に適した地形であったと予測される。昭和 58 年度以降 17 回の調査が行われ、5 つの曲輪や西グスク、東グスクと呼ばれる平場が確認された。北谷城が所在する丘陵は貝塚時代後期から利用されるが、11 ～ 12 世紀には平地の遺跡が活況する。13 世紀に再び利用され、早ければ 13 世紀後半から築城に伴う造成が行われる。14 ～ 15 世紀に最盛期を迎え、15 世紀中頃から 16 世紀前半に廃城となる。堅牢な石垣や殿舎跡の他、威信財となる貿易陶磁器の出土等から、勝連城跡や中城城跡に匹敵するグスクといえ、「おもろさうし」からも有力な按司の存在が窺える。廃城後は聖城として尊崇されていたが、沖縄戦時に日本軍によって戦争遺跡が丘陵一帯に構築され、戦後は米軍基地に接収された。一部の拝所をグスク外へ移転させられるも、地域の尽力により再びグスクへ遷され現在も祭祀が行われている。以上、北谷城は他に例を見ない独自性の高い拠点的グスクである。

北谷町文化財調査報告書　第45集

北谷城（ちゃたんぐすく）

－ 総括報告書（補遺編） －

編　集：　北　谷　町　教　育　委　員　会

発行年：　2020年（令和2年）10月

〒904-0192　沖縄県北谷町字桑江226番地

TEL 098 － 936 － 3159

印　刷：　株式会社　東洋企画印刷

〒901-0305　沖縄県糸満市西崎町4丁目21-5

TEL 098 － 995 － 4444